

玄米食は、我われ日本人には「食」の原点である。

それ故玄米食を始めると、かえって味覚が敏感になる。

森信三先生一語千鈞より

再生

山又

人



「二〇二五年になったら、日本は再び立ち上がる兆しをみせるであろう。二〇五〇年になったら、列国は日本の底力を認めざるを得なくなるだろう」

日本の父へ

グスタフ・フオス 著

1父ありき―私は父からこう学んだ

人生の先輩

家庭教育とかしつけ、あるいは父母の役割などについて講演した後で、たまに、「先生はどの大学で、なんという教授について教育学を勉強なさったのですか」と、訊かれることがある。私は全く答えに困ってしまうのである。教育学は私の専攻ではないし、児童心理とか教育理論とか教育史などの勉強を専門的にやったこともない。むろん、それらの単位はとったことがあるが、私にとって特に役立ったとはいえないし、私の考え方に強い影響を与えたとも思えないのである。

しかし、こういったからといって、大学の教育、あるいは大学の教授を非難するつもりではない。私がいいたいのは、私の教育学の教室は大学よりも私を育ててくれた家庭であったということである。だから、「どちらで勉強なさったのですか」と質問される方には、次のように答えることにしている。

――今、皆さんにお話したことの大部分は両親に習ったのです。父や母の教育に対しての信念とか熱意、あるいは暖かい愛情のこもったしつけや指導、それらを私は身をもって体験したのです。専門的な勉強よりもこの身をもっての体験が、私の教育に関しての考え、自信をつくりあげたのです……。

それは言い過ぎではないかと思われるかもしれないが、そうではない。教育とはどういうものであるか、どうあるべきかということを、私は両親から、しらすしらすのうちに教えられたのである。

いうまでもなく、親と子のつながりは、他の人、たとえば学校の先生とのかかわりよりも深いもので、教育をし、教育を受けるのに最も自然な環境をつくるものである。わが子をよい子に育てあげたいという抑えがたい親心、そして親に愛してもらいたい、親に頼りたいという子供の欲求――この二つは互いに影響しあって、他にあり得ない人間教育のよき条件とな

る。子供の教育における両親の役割は、実に類のない、最も重視すべきもののなのである。

主に男子の教育に三十年ほどたずさわってきた私の経験では、男の子の教育の場合、父親の役割がとりわけ大きいと思う。しかも、家庭にまで激しい変動をもたらしている現代社会では、その役割は以前にもましてはるかに大きくなっている。今日こそ、父親はわが子の教育の傍観者であってはならず、直接参加しなければならぬのである。これは父親の特権なのであって、母親、ましてや学校の先生に委ねてはいけない尊い任務なのである。

この父親の教育参加は難しい注文だとよくいわれている。これに対して、私はやろうと思えばできることだと断言したのである。そのために、私は、私の父についての懐かしい思い出を記してみた。さまざまなエピソードや出来事にすぎないものであるが、それに私の反省や感情をつけ加え、教育に対する父親の役割について、読者の参考に供したいと思う。

教育というものは、時代や国境を超越するものである。もちろん、教育は時代の特色、国の歴史や伝統、家庭の宗教、親の人生観など、さまざまな条件に影響されて成り立っているものではあるが、変わることにない普遍的な要素もある。なぜなら、教育の対象は人間だからである。教育の出发点は人間であり、その到達点は、人間――正しい人間、よりよい社会人、しっかりとした国民なのである。私は、時代や国境を越えた教育的視野こそ、今日の国際社会に必要であると深く信じている。このような意味で、私のささやかな思い出――四、五十年前のドイツのある父と子についての思い出が、読者のお役に立てば望外の幸せであると思う。

私は父の姿をありのままに描いたつもりであるが、読み返してみると、父を多少理想化してしまったのではないかと感じないこともない。そんなことは全くな�いとはい切れない。父親をみる目は、年が経つにつれて変

実践人福岡仁風読書会 第一二回 11月1日

場所：仁風庵

(実践人の家の会員であればなたでも参加できます)

(参加費無料) 詳細は、世話人へお問い合わせください。

わっていくからである。

父親の眞の父性がわかるのは、おそらく子供が三十歳を過ぎてからであろう。

「父親になってはじめて、おやじが私のためにたいへん苦しんだことがわかりました。私のために、それほど心を砕いてくれたとは知りませんでした。おやじの有難みが、今になって漸く身にしみてきました。……」

というような率直な話を、よく卒業生から聞かされる。

結局のところ、父親というものは、自分のなしたこと、なしつつあること、そしてなしたいと思うことを、そうたやすくは身内の者にも話さない場合が多いのである。男には誇りや自尊心、そして微妙なはにかみもあるし、困難に逢着しても自分ひとりの胸に秘めておこう、自分ひとりで何とか切り抜けてみようという自覚が強い。母親にも子供にも、理解しづらい点がある。二十年間も父と一緒に生活した私自身も、父の本當の姿を識るには、やはり長い年月が必要であった。

父と別れて三十数年後のある日の出来事である。所用で暫くの間ドイツに滞在して、再び日本へ帰る二、三日前、もう一度、両親の眠っている墓地を訪ね、最後の挨拶をしたいと思った。その折、父の墓前で静かに祈っている見知らぬ老人に出会った。

「私の父を御存知でしたか」と私が尋ねると、その老人は私の全く知らなかった父の一面を語ってくれたのである。

——私は、あなたのお父さんとは古くからの知り合いであった。何十年も一緒に仕事をした間柄です。知り合いと言いましたが、むしろお父さんは私の恩人でした。何時までも忘れられないいい人でした。

私には苦しみが多かったのです。ナチスに逮捕されて、財産全部、家まで没収されてしまいました。われわれユダヤ人は大変だったのです。妻は牢屋で死にました。殺されたのかもしれない。そういう私をあなたのお父さんが助けてくれたのです。お父さんの助けがなかったら、私はこうして生きていないでしょう。独りぼっちで、最後まで生き抜くことはできなかったでしょう。しかも、私一人だけではないんですよ、助けてもらったのは。

だから、よく墓参りに来ます。いくら感謝してもきれないのですか

ら……。

そして、私が神父の服を着ているのに気付いたらしく、次のように言った。

——あなたは神父様ですね。外国のどこかで教会の仕事をなさっていると伺っていましたが。

『日本の父へ』を読んで——グスタフ・フォス著

森信三先生の『父親人間学入門』の中で推薦されていたご著書ということで、どうしても拝読したいと思い、古本屋をいくつも歩き回りました。そしてようやく探しあて手にしたのが、グスタフ・フォス著『日本の父へ』です。手に取った瞬間、長い時を経てこの本に出会えたことへの不思議なご縁を感じました。本書は、著者が長年日本で教育に携わりながら見つめてこられた「父親のあり方」についての深い省察の書です。フォス氏は、父親は決して教育の傍観者であってはならず、子どもの成長に直接かかわるべきであると説かれています。その言葉には、教育を超えた人生観の眞実が息づいており、読み進めるほどに胸を打たれました。特に印象的だったのは、「威厳ある父親」とは、決して権威的な存在ではなく、子どもと共に歩み、共に成長していく姿勢を持つ人のことだという点です。父親の背中は無言のうちに子どもへ人生の方向を示す——その眞理に、深い感銘を受けました。私自身の父を思い返し、あの静かな存在感の中にどれほどの愛情と責任があったかを改めて思い知らされました。現代社会では、父親の役割が次第に薄れているように思われます。しかし、家庭を支えるのは経済的な力だけではなく、子どもと心を通わせる時間と姿勢であることを、フォス氏の言葉が改めて教えてくれます。そして私は、この書に流れる精神が、わたしの提唱する「古き良き日本の再生」にも相通ずる一面をもつように感じました。家庭の中に再び温かく確かな絆を取り戻すことこそ、社会全体の再生の第一歩ではないかと思えます。この感動を、機関誌「再生」にて取り上げ、道友の皆さまにもぜひご紹介したいと考えております。本書が多くの方々を読まれ、父として、人としての在り方を見つめ直す一助となれば、これに勝る喜びはありません。

頓首 富吉袈裟右衛門 拝

第二章 掃除が会社を変える

私が社員を叱るとき

お客様に喜んでいただき、社員同士が気持ちよく仕事をすれば、利益よりも大切なものが得られます。それは心の温かさです。社内の売り上げ競争、会社同士の価格競争、そんなものを優先していたら、かならず誰かを犠牲にします。

今の大きな企業には「利益にならないことはしない」という風潮がはびこっていますが、みんなが自分の利益だけを考え、「勝ち組」「負け組」などといって他人を蹴落とそうとしている社会に未来はありません。

私は何ひとつ人より優れたものをもっていないので、人と競争すれば負ける。ですから、私自身が「競う」ということが嫌いであり、社員にそれをさせたくはありません。

私が心に刻んでいる言葉に「心温かきは万能なり」というものがあります。心の温かさとは、つまり人に喜びを与えるということです。この心の温かさで商売を成り立たせなければいけません。

きれいなお店で、気持ちいい接客で買い物をしていただく。お客様にもものを買っていただいて、心から感謝する。それがお客様の喜びにつながり、次の仕事につながっていくという仕事のしかたが理想的だと思います。

その対極には、「利益にならない相手」に対して、とことんひどい扱

いをする商売があります。安売り店は一見お客様に対してサービスしているように見えますが、下の立場の納入業者に対して商品を安く買いたたき、自分の会社の利益を確保しているというところも多いのではないのでしょうか。

私は、このようなことが許せません。まっとうな商売というのは、正当なサービスに対して、正しくお金が支払われて成り立つものです。それは自分の利益になるか否かにかかわらず、相手を尊重するということなのです。

ですから、私はほかのことで社員を叱ることはめったにありませんが、出入りの業者の人に横柄な態度で応対する姿を見つけたら、きつく叱ります。納入業者、資源回収業者の方、宅配便の配達の方など、どの人が欠けても、私たちは商売をすることができないのです。社員には、常に感謝の気持ちをもつて、相手が誰であつても喜びを与えられるような仕事をしてもらいたいと願っています。



日本一きれいな博多駅・福岡の街に！

第 384 回

博多駅 早朝清掃

毎月 **8** 日 午前6時15分～

【第一回】平成5年12月8日開催

福岡実践人・JR九州博多駅
精華女子高等学校・福岡掃除に学ぶ会

 **ハウスマイト**



第384回 博多駅早朝清掃 満32年達成

11月8日(土曜日)

84名参加



博多駅早朝清掃活動は、今年で32周年を迎え、384回目を迎える節目の清掃となりました。九州外からは北海道、岩手、広島など、遠方から43名の道友が参加し、総勢84名で博多駅周辺の清掃を行いました。参加者は前日から準備に携わり、朝5時30分には自然と集合場所に集まり、何の指示もなく動く姿が鍵山掃除道の本質を物語っていました。博多駅長も参加し、32年の歴史と伝統に賛辞を送っていただきました。創会者である帆足行敏先生の写真が展示され、活動の原点を振り返りながら、岐阜県から参加している田中相談役は、この清掃活動が新宿駅など全国に広がった影響について話されました。

また、森信三先生の「ゴミはその街の文化の象徴ですからね」という言葉が、活動の根底に強く息づいていることを改めて実感しました。

20年間活動のお世話をさせて頂いた富吉は代表を退き、後進への道を譲りました。これからも清掃活動を通じて、地域社会に貢献し、より多くの仲間と共に活動を広げていくことを誓い、これまでの努力に感謝しつつ新たな歩みを進めてまいります。

富吉袈裟右衛門 拝



大学生の進行役と博多駅長



博多駅長のご挨拶

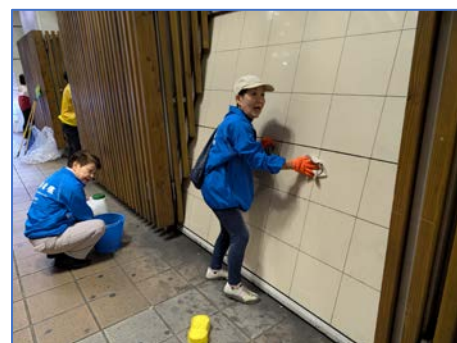
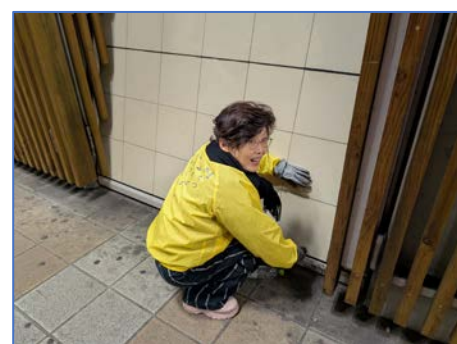
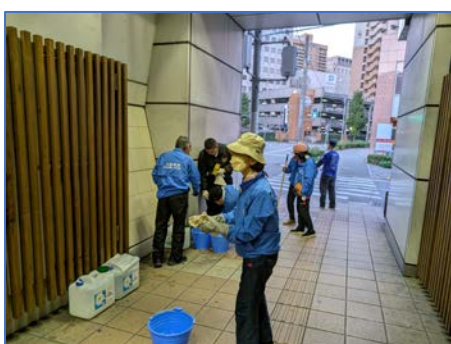
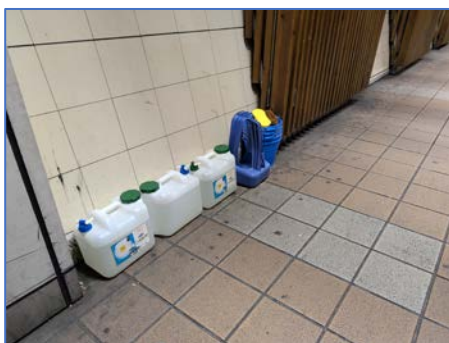
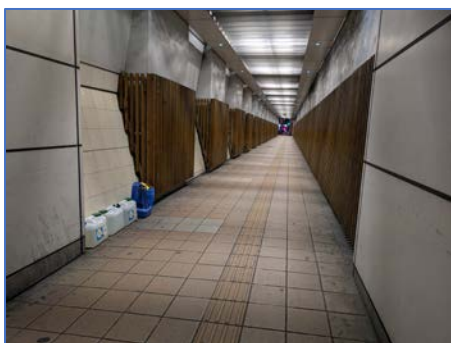


田中相談役と博多駅長



兵庫県から師友K/Kさん





県外から多くの道友が参加してくれたこともあり、長年の懸案となっていた空港通り「博多駅東通路」の壁タイルと格子の清掃に取り組みました。事前に福岡市環境局の承諾を得て、誘導員の配置も行い、準備を整えて作業に入りました。参加したのはベテランの道友ばかりでしたが、この場所での清掃は初めてです。道具の準備やシミュレーションを重ねて臨んだものの、実際に作業してみると、着手方法や道具の使い方、仕上げの手順など、振り返ってみれば多くの反省点がありました。ただ「綺麗になればよい」ということではなく、「掃除に学ぶ」という姿勢を改めて心に刻む大切な機会となりました。今回の経験を生かし、今後もより良い実践につなげていきたいと思います。 世話人：けさえもん 拝



松原先生



臂先生



木南先生



北村先生

福岡実践人第45回研修会（8日）講演記録

8日の研修会では、臂先生、松原先生、木南先生、北村先生の4名の講師の先生方をお迎えし、心に深く響くご講話の数々を頂戴いたしました。いずれのお話も、先生方が長年にわたり歩んでこられた実践に裏打ちされたもので、参加者一同に多くの学びと気づきを与えてくださいました。

まず、**臂先生**には、森信三先生の『一日一語』を題材に、日々の言葉の積み重ねがいかに私たちの生き方を形づくっていくかについて、温かく丁寧にお話しいただきました。毎日一つの言葉に向き合い、その中に自らを照らし返す機会をいただくことの尊さを、改めて感じさせていただきました。

続いて、**松原先生**には、ご自身のこれまでのご経験を通して、「後続く者たち」へどのような姿勢で生き方を示していくかについてお話しく下さいました。静かで真摯な語り口から、人生を歩む上での覚悟と優しさが伝わり、参加者の胸に深く刻まれる内容でした。

木南先生には、世界的な課題となっている漂着ごみ問題について、「世界は一つ」という視点から丁寧に説明いただきました。未来の子どもたちに決して重荷を残してはならないという強い願いが込められたお話で、環境に対する私たち一人ひとりの姿勢を改めて問われる時間となりました。

最後に、**北村先生**には、ご自身の体験を踏まえ、ストイックな生き方にほんの少し“ゆるみ”を持たせることで、日々楽しさや豊かさを見いだせることについてお話しいただきました。自分を縛りすぎない生き方の大切さを、優しい言葉で示して下さり、多くの参加者が心を軽くされたように感じられました。

四名の先生方のお話はいずれも、謙虚で実直なご実践から生まれた珠玉の学びに満ちており、参加者にとって忘れ難い貴重な一日となりました。先生方から頂戴したお言葉を胸に、今後の歩みに生かしてまいりたいと思います。



山本先生



山路先生

福岡実践人第45回研修会（9日）講演記録

9日の研修会では、山本先生と山路先生のお二人を講師としてお迎えし、心温まる学びの時間を頂戴いたしました。お二人の先生方の長年の実践に基づくお話は、参加者一同に多くの気づきと深い感銘を与えてくださいました。

まず、**山本先生**には、30年以上にわたりお一人で続けてこられた掃除の実践をとおり、「掃除とは何か」という問いに真摯に向き合っただけでこられた思いをお話しいただきました。掃除が単なる作業ではなく、自らの心を整え、日々の生き方を磨く大切な営みであることを、具体的なお話を交えながら丁寧に伝えてくださいました。その静かで深いお言葉に、参加者の多くが胸を打たれました。

続いて、**山路先生**には、小学校6年生の児童とともに取り組まれた漂着ごみ問題の授業についてご紹介いただきました。子どもたちが実際の学びの中で環境問題を自分自身の課題として捉え、真剣に向き合っていく姿を、温かいまなざしでお話してくださいました。教育の現場で一步一步積み重ねてこられた実践の深さに、改めて頭の下がる思いがいたしました。

お二人の先生方のお話はいずれも、日々の実践の中から育まれた尊い学びに満ちており、私たちが今後の生活や仕事の中で大切にしていけるべき多くの示唆を与えてくださいました。このような貴重な講話を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

福岡実践人第45回研修会 二日間のまとめ

今回の研修会は、二日間で6名の先生方からお話をいただき、さらに32年間続いてきた博多駅の早朝清掃も振り返る、とても学びの多い時間になりました。

8日には、臂先生からは『一日一語』に込められた「日々の積み重ね」の大切さを、松原先生からは「次の世代にどう生き方を示すか」という問いを伺いました。

木南先生のお話では、漂着ごみを通して環境問題を自分ごととして考える必要性を教えてください、北村先生からは「少し自分をゆるめることで見えてくる心の余裕」について学びました。

9日には、山本先生が30年以上続けてこられたひとり掃除のお話から、続けることの力や、掃除が心を整える営みであることを教えてくださいました。

山路先生からは、6年生と一緒に取り組んだ漂着ごみの授業を紹介していただき、子どもたちの学びと環境への気づきについて考えさせられました。

また、長く続いてきた**博多駅早朝清掃32年の振り返り**では、続けることの尊さや、掃除を通して仲間と心を通わせてきた歩みを改めて感じることができました。

二日間を通して、

・小さなことを丁寧に続けること ・環境や次の世代を思う姿勢 ・自分の生き方を静かに見つめなおすこと、この三つが大切だと、改めて気づかされました。

2025.11.16 於：戒壇院作務に学ぶ会 第30回／T70回



今朝の戒壇院は、イチヨウの葉がまるでじゅうたんのよう境内を彩り、秋の深まりを感じさせていました。

第70回目となる「戒壇院作務に学ぶ会」には、ご住職もご参加くださり、節目の会に華を添えてくださいました。第三日曜日は座禅会が行われる日でもあり、座禅に参加される方々も、座禅の前に作務行を共に体験しました。

ご住職は「座禅よりもお掃除という作務のほうが大切である」とお話しされ、心を整える日常の営みとしての作務の意義を改めて感じさせてくださいました。

2025.11.16 於：太宰府観世音寺トイレ掃除



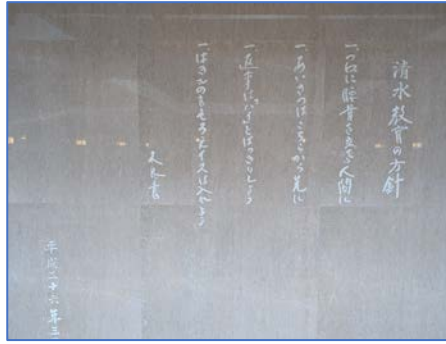
太宰府観世音寺におけるトイレ掃除作務は、宮城県多賀城市と太宰府市との古い歴史的つながりを背景に始まり、今回で4回目を迎えました。奈良時代、陸奥国府・多賀城と九州の政庁・太宰府は、国家の東西を支える重要な拠点として互いに呼応し、遠く離れながらも同じ国づくりを担った地です。その歴史の縁が、時を超えて、私たちの掃除作務という形で再び結ばれています。

そして今回は、あえて大人数で取り組む掃除ではなく、少人数で、一人でも続けられる作務のあり方を大切にしたいと思います。

——「今回で4回目ですが、大人数で取り組む掃除とは違い、少人数で、一人でも行う事の出来る掃除道作務の神髄をこの場をお借りして進めてゆきたいと思います。」

鍵山掃除道は、華やかな行事ではなく、日々の足元から静かに世界を整えていく道です。一人であっても、誰に見られるわけでもなくとも、黙々と場所を清めていく。そこに心が整い、やがて周囲の空気や人へと穏やかな波紋が広がっていきます。太宰府と多賀城を結ぶ目には見えない縁のように、掃除もまた、静かで確かなつながりを生み出す営みです。

古代の人々が国の安寧を願って築いた二つの地で、いま私たちは同じ祈りをもってほうきを手にします。歴史が紡いだ絆に感謝しつつ、鍵山掃除道の心を一人ひとりが体現し、未来へ受け継いでいければと思います。



◆ 清水保育園訪問記

—第45回福岡実践人研修会・最終日（11月9日）—

第45回福岡実践人研修会の最終日、11月9日午後。県外からの参加者二十数名で、森信三先生ゆかりの「清水保育園」を訪ねた。博多駅から歩いて二十分ほど、秋の風を感じながら園へ向かう道のりは、どこか巡礼にも似た静かな高揚感に満ちていた。

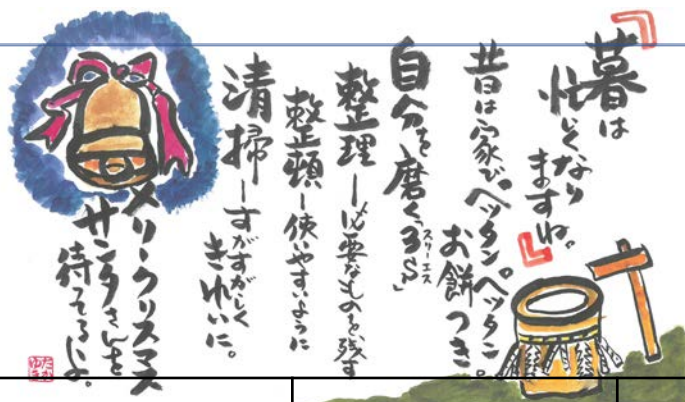
この日は日曜日であったにもかかわらず、園長先生と理事長先生が温かく迎えてくださった。園長先生は、幼少期に仁愛保育園にて、森信三先生から直接「腰骨を立てる」指導を受けたご自身の体験を丁寧に語ってくださった。また、「うすら覚えではありますが」と前置きをしながら、一般には伝わっていない貴重な思い出をいくつもお話しくださり、参加者一同は深く胸を打たれた。

ご挨拶の後、園長先生から「どうぞ、建物を自由に見て回ってください」との声をかけていただき、私たちは園内を思い思いに巡った。静かな日曜日の園舎には柔らかな光が差し込み、子どもたちの息吹がそのまま残るような穏やかな雰囲気が満ちていた。

園内のいたるところに、森信三先生の“立腰教育”の精神が息づいているのを感じた。姿勢の大切さを伝える掲示や、子どもたちの生活導線に巧みに組み込まれた「立つ」「座る」のしつけ、先生方の所作にまで表れる凛とした空気。その根底には、森信三先生が生涯をかけて広めた**「躰けの三原則」——①挨拶、②返事、③履物を揃える**——が確かな形で受け継がれていた。

玄関には靴がきちんと揃えられるよう丁寧な工夫が施され、園児たちが自然に挨拶を交わせる環境づくりが随所に見られた。これらは単なる習慣としてではなく、「人としての根っこを育てる教育」として園の生活に溶け込んでいることが感じられた。 訪問後記：富吉袈裟右衛門 拝





再生十二月号

令和七年十二月八日発行

(毎月一回八日発行)

創刊 平成二十八年九月二日

発行人 富吉製装右衛門



根っ子の友は
ありがたき
哉

	12月						1月						2月					
日	5	8	20	21	21	27		8	17	18	18	31		8	15	16	16	22
曜	金	月	土	日	日	土		木	土	日	日	土		土	土	日	日	土
行事活動名	長目の浜海岸清掃 第35回	博多駅早朝清掃 第385回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺 トイレ掃除 第5回	戒壇院早朝作務 第30回	住吉神社便教会	長目の浜海岸清掃 第35回	博多駅早朝清掃 第386回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺 トイレ掃除 第6回	戒壇院早朝作務 第31回	住吉神社便教会	長目の浜海岸清掃 第35回	博多駅早朝清掃 第387回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺 トイレ掃除 第7回	戒壇院早朝作務 第32回	住吉神社便教会
場所	鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	太宰府市観世音寺内	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内	鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	太宰府市観世音寺内	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内	鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	太宰府市観世音寺内	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内
開始時刻	9時00分	6時15分	6時15分	5時30分	6時30分	6時15分	6時30分	6時15分	6時15分	5時30分	6時30分	6時15分	6時30分	6時15分	6時15分	5時30分	6時30分	6時15分
運営団体	楽農人 とんぼろ海掃除隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	楽農人 とんぼろ海掃除隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	楽農人 とんぼろ海掃除隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会

上記行事予定表は、福岡掃除に学ぶ会全体の行事を掲載させていただいています。
その他、活動しているお掃除実践もございますので、事務局にお問い合わせください。

発行人(編集人)富吉 製装右衛門

◇NPO法人福岡実践人 福岡掃除に学ぶ会

Lineグループ運営:福岡清爽クラブ

◇福岡仁風読書会

◇NPO法人楽農人 とんぼろ掃除に学ぶ会

〈合同事務局〉〒811-2247

福岡県糟屋郡志免町向ヶ丘2丁目4番3号 《仁風庵》

TEL 092-931-8155 FAX 092-931-8120

E-mail fukusoukai@souji.link (掃除)

こしき仁風庵:鹿児島県薩摩川内市里町里90番地



「再生」に掲載している写真は、富吉が撮影・管理しています。必要な方は事務局までご連絡ください。